

## ECR2015 参加報告記

北海道大学病院 笹木 工

今年の ECR は当院 CT 室より 2 名参加することになった。勤務配置を考慮し自分は初日からの参加ではなくすこし遅れて出発することになった。出発予定日には昨年利用した「真っ赤っか」のオーストリア航空の運航がないため、いつも利用している青い航空会社を利用し羽田からミュンヘンを経由しウィーンへ行くことになった。昨年のフライト中は珍しく？アルコールは一滴も飲まなかったのが、今年は飲むことに専念した。イツモの航空会社、787 という快適な機材ということもあってか、葡萄から作られた液体は瞬く間に乾燥していく。何回もおかわりしたためか、CA さんに「お酒、つよいんですね」と言われてしまった。

「キミがそうさせたのさ...フツ」と言うことができず、酔っ払いオヤジは最後列の窓側で眼下に広がる東ヨーロッパ平野を眺めた。軽い頭痛を自覚したため、ミュン



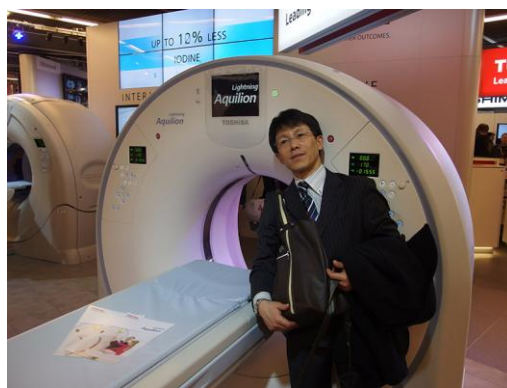
乾燥が早かった葡萄ジュース

ヘンまでの残り時間はおとなしくすることにした。

経由地のミュンヘン空港で入国審査をすませたあと、小さな飛行機でウィーンへと向かった。ウィーンで再度入国審査をするのかと思ったら昨年通過した場所は通らずにあっさり出口へでた。「一度入国審査したからいいのかな？ EU 圏だから??」よくわからないまま市内へ向かう S-bahn に乗るために地下にある駅へ向かった。後日調べてみると、EU 加盟国と欧州自由貿易協定加盟国の計 26 カ国で「シェンゲン圏」という領域を形成しており、どこの国籍でも旅券検査などの出入国審査が廃止されているそうである。最初は 1985 年の 6 月に 5 カ国の署名で始まったとのことである。ちなみにシェンゲンはルクセンブルクにある土地の名前である<sup>1)</sup>。不勉強（というより世間知らず）がバレバレであるが、非常に便利な仕組みのお

かげで、難なくウィーンの地を踏むことができた。

ここで身近な JRC と ECR を比較する。始めにネームタグのネクストラップの色についてである。JRC は日本医学放射線学会 (JRS) との合同開催ということもあってか、医師と技師はネクストラップの色が異なる。色を見ると職種がわかる仕組みであるが、ECR はそのような区別がない。参加者かメーカーかの 2 種類しかない。また機器展示であるが、国際医療画像総合展 (ITEM) の機器展示場は 1 つの階で大きな会場に集約されている。一方 ECR は展示会場自体が狭く天井も低いために階も分散されている。エスカレーターを使って上ったり降ったり、あっちに行ったり、こっちに行ったり... といった様子で ITEM より疲れる。ITEM より明確な意思をもって見学したほうがよい。ITEM では見かけたことはないが普段お世話になっているメーカーが展示をしていた。東芝製 CT でも使用している高圧発生装置メーカーの Spellman が展示していたのは少々驚きであった。発生器がそのまま展示してあった。その他、なにやらアヤシイ phantom メーカーとかいろいろ見られて興味深かった。それらのブースを通り過ぎ、昨年と同じ奥まった場所に陣取ったのが東芝である。ONE も PRIME も使っていることもあり、それほど期待はしていなかったが、なにやら見たことがない丸い機器が展示してあった。「ん？ なんだこれは??」と思ってよく見ると、同社 MRI の Vantage Elan によく似たスタイル、カラーリングの新しい CT であった。「Aquilion Lighting といいます！ ECR がデビューです！」との説明を受けた。ITEM はいつも人だかりの東芝ブースであるが、ECR の東芝ブースは P 社や S 社と違ってゆったりしている。おかげで新しい CT の説明をゆっくり聞くことができた。



一足早く Lightning とご対面

JRC で主なスケジュールとして組まれている演題発表であるが、

ECR では少なく、JRC で言う教育講演やシンポジウムが大半である。本当に勉強しにいく場所という印象がある。初学者からプロフェッショナルまで、放射線科医や技師など様々な要求に応えられるように、いろいろなレベル、コースが用意されている。内容もより実践的であり、例えば、腹痛でこういう症状のときにはこの検査がベストという内容である。小児や救急撮影といった領域も数多く見られるのが特徴である。勉強になる ECR であるが「現地なんて行けないよ～」という方、ご安心あれ！ ECR Live が用意されている。日本の場合は 8 時間の時差を考える必要があるが、文字通り講演を Live 中継する仕組みである。昨年まで€10 で動画を購入できたが、今年からは、1500 以上の講演が無料で閲覧できるようになった。ECR への登録が必要。学会終了約 1 ヶ月後から閲覧可能)。興味のある発表をじっくり見ることができる環境にある。つまり、極論するとウィーンに行く必要がない。最前列の個別に仕切られた空間に横たわるなら別であるが、最後列の狭いシートでわざわざ 11 時間以上もかけて飛行機にのる必要もない。ではなぜウィーンに行くのか?? 演題が採択された事による自分への褒美か、あるいは、日常生活にはない景色・雰囲気・食べ物を堪能し、また頑張ろうという動機付けなのであろうか... 理由は明確ではないが、間違いなく言えることは今年もまた魅了されたということである。何度でも行きたくなる場所である。

最後にオススメを 2 つほど紹介させていただく。

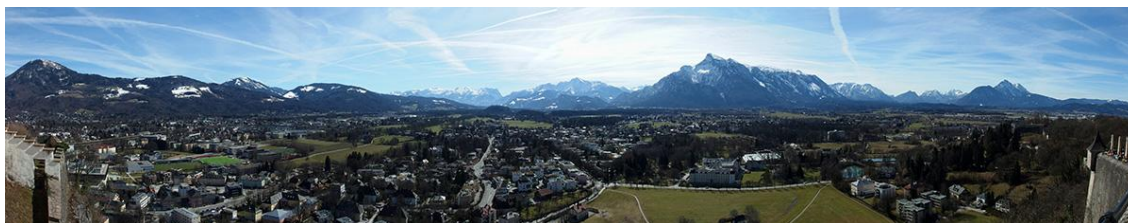
一つ目はウィーン交響楽団のコンサートである。下世話な酔っ払いオヤジには似合わないという声が聞こえてきそうであるが、しばしお付き合いを。年末年始の TV 番組で唯一の楽しみにしているが某局で放送されるウィーンフィルニューイヤーコンサートである。楽友協会という場所で開催されるが、毎年自宅で録画を鑑賞していたことも



最後の曲を終了した後に撮影しました

あり、いつかはコンサートを鑑賞したいと思っていた。今年は幸運にもウィーンフィルの生演奏を聴く機会を得た。今年のニューイヤークンサートの指揮者とは違ったが、素晴らしい演奏と音響は鳥肌モノである。

二つ目はホーエンザルツブルグ城のレストランである。名前をみてもおわかりの通りザルツブルグにあるその城は、街のシンボルとなっている。ザルツブルクはウィーンからオーストリア連邦鉄道の railjet を使用して約 2 時間 20 分の距離である。ザルツブルグ駅からバスに乗るのよし、歩いて行くのもよい。駅から城に向かう途中には、映画サウンド・オブ・ミュージックで「ドレミの歌」のシーンで使われたミラベル庭園がある。映画好きの方は訪れてみるとよい。ホーエンザルツブルグ城内のレストランはオープンテラスの場所がある。アルプス山脈を眺めながらの食事は、天気にも恵まれたこともあり、とても素晴らしいものであった。



ホーエンザルツブルグ城よりアルプス山脈を望む

## 参考 URL

- 1) <http://ja.wikipedia.org/wiki/シェンゲン協定>